

朝日 歌壇 俳壇



〈日曜日のブローチ 23〉 junaida

短歌時評 鏡像としての女人短歌

山崎 聡子

戦後まもなく結成された女性歌人による短歌結社「女人短歌会」の再評価が進んでいる。同会は女性歌人の活躍の場に限られていた時代に、歌誌「女人短歌」を発行し、「女人短歌叢書」として女性歌人の歌集出版を後押しした。現在では語られなくなっていた彼女たちの物語を伝えるのが、一昨年出版された濱田美枝子の『『女人短歌』 小さなものの芽生えを、女性から奪うことなかれ』であり、このたびに発行された瀬戸夏子の『を

とめよ素晴らしき人生を得よ』だ。瀬戸による熟を帯びた序文で語られるとおり、近現代の短歌史において、与謝野晶子のようなスターを除き、女性歌人たちは傍流に追いやられ、ときにスキヤンタルの対象となってきた。本書には、女性だけの会設立に懐疑的だった五島美代子に「女なら認められない多くの女歌人のために(中略)仲間入りするのが当然ではありませんか」と追った長沢美津の肉声が、並外れた知識人でありながら

「芥川龍之介の最後の恋人」という物語を背負われた片山廣子の晩年の静謐な歌が、互いの歌の理解者であった萬原妙子と森岡貞香の絆が、海外の女性作家たちのエピソードと重ねながら記される。女性同士の連帯を示す「シスターフッド」は、近年、文学の一大テーマとなっている。しかし、女性たちは決して一枚岩ではなく、ときに立場を違え、感情を渦巻かせながら、それでも時代が彼女たちを結びつけた。その姿は現在を生きる女性たちの鏡像であり、現代にも書く私たちの言葉も彼女たちの土台の上に立っているといえるだろう。(歌)

第71回角川短歌賞 角川文化振興財団主催。京大短歌に所属する船田愛子さん(20)の「雪の影」(50首)に決まった。奥村晃作歌集「天啓」「気付き、発見、認識系のただごと歌」を提唱し、実践してきた89歳の作者による第20歌集。〈寄せて来てテトラポッドにうち当たりしぶけるまでの波を見たりき〉(短歌研究社・2750円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかき1枚に1作品、横に住所・氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿でき

特攻の千の螢が帰る秋 (川口市) 青柳 悠
性問はず国籍問はず踊の輪 (茅ヶ崎市) 西岡 青波
☆地獄へと引き戻さるる屋簷 (福島県伊達市) 佐藤 茂
一言に一言返す生身魂 (野田市) 塩野谷慎吾
生身魂家族写真の真ん中に (西海市) 前田 一草
拿寿とふ命の関所越えて秋 (大村市) 小谷 一夫
自らの腹へ注射器終戦日 (小山市) 小林 申忠
もう誰も通らぬ畦の曼珠沙華 (東京都板橋区) 竹内宗一郎
悪戯な子大に弾く鳳仙花 (厚木市) 北村 純一
愛犬の残暑に耐へてゐる姿 (島根県邑南町) 服部 康人

【評】一席。特攻の若者たちが螢となって帰ってくる。美しく悲しい幻想。二席。いつかこんな世の中に。願いの一句。三席。この世は地獄とでもいいたいのだ。「引き戻さるる」に実感あり。十句目。焼ける道路を歩かねばならない。人間より大変。

三猿に終はるべからず敗戦忌 (京都市) 室 達朗
火星より地球へ墓参する未来 (東京都世田谷区) 関戸 裕二
空蟬と並べて孫の置手紙 (いわき市) 小野 康平
飢餓の子の嘆きの声や蟬しぐれ (横須賀市) 阿部 文彦
遠花火艦砲射撃と祖母の言ふ (南房総市) 山根 徳一
☆地獄へと引き戻さるる屋簷 (福島県伊達市) 佐藤 茂
霧流れ何処へ行つたか裕次郎 (加東市) 藤原 明
亡き人のまばたきに似て曼珠沙華 (相模原市) のなかあけみ
紅葉狩りにひとつの駅に下車 (新座市) 丸山 巖子
空蟬と落蟬見入る一歳児 (松山市) 正岡 唯真

【評】第1句。戦争の悲惨は語り継がねばならない。「見ざる聞かざる言わざる」で終わってはならない。第2句。人間は何時から火星で暮らすようになるのか。勿論地球を忘れたりはいしない。第3句。「空蟬と並べて」が如何にも孫の置手紙らしい。

登高や風とひとつになるところ (京田辺市) 加藤 草児
子育ての排鳥鴨家に今朝の秋 (豊前市) 三原 逸郎
言の葉はみな過去のもの星流る (上越市) 相川 澄子
干からびし友を偲びて蚯蚓鳴く (横浜市) 岡部 豊
熱帯夜もがけはもかくほど虚ろ (酒田市) 野澤 勝
トンネルは七つあったと帰省の児 (新潟市) 江端 妙子
村の子の課外授業や氷室にて (奈良市) 名和 佑介
蜻蛉を見上ぐる母を見上ぐる吾 (東京都新宿区) 山崎 力
蟻一匹狂つたやうに歩いてる (横浜市) 込宮 正一
白い歯が歌う校歌や雲の峰 (高松市) 塩田八寿子

【評】加藤さん。汗の身を風に吹かれる爽快と高揚。三原さん。普通名詞を固有名詞のように使って親しみと可笑しみを演出。相川さん。千年前の皿や茶碗はあくまで保存や鑑賞の対象となる文化財だが、言葉は普通に実用品だ。思えば凄い事。

西瓜の皮鬼のパンツの縞模様 (大分県日出町) 松鷹 久子
こいつぞ椅子持つてきてビール注ぐ (対馬市) 神宮 齊之
草むらの蚯蚓の卵柔らかし (神奈川県大井町) 新井たか志
プール底点検するや水中ロボ (八幡市) 小笠原 信
古書店に落ち着く心齋祭忌 (大垣市) 大井 公夫
人生にいくつの浮沈草田男忌 (川崎市) 神村 謙二
見つめ合うプールサイドの白熊と (船橋市) 金澤 晴美
猫近づてしまひ墓碑銘「草の花」 (川越市) 佐藤 俊春
ちやつかりとしてゐて強し生身魂 (船橋市) 斉木 直哉
熱帯夜アンリ・ルソーの絵が浮かび (本巣市) 清水 宏晏

【評】一句目。鬼のパンツといえは虎柄だが、西瓜の皮も似ている。一読して楽しくなる。二句目。我が家の手順でお客様をもてなす。三句目。硬い殻を持つ卵との違いに興味津々。四句目。役に立つロボットは愛らしい。兵器利用はお断り。